

OB会報

東京都大田区池上
7-21-10
発行責任者 土岐悦康
編集 森宮延信
平方朝彦

OB会再建 気運盛り上げる

日本大学吹奏楽研究会も発足以来十六期目の卒業生を送り出し、卒業生（OB）の人数も百七十〇名を超え、卒業生の中からは不幸にも二名が欠けました。年代こそ違え同じ名のもとに在りて同じ目的のために活動した仲間のため、OB有志によつて甲斐金が集められOB会の名でその葬儀に参列いたしました。

しかしこの時点で二つの疑問が生じました。一つはOB会の名称で出された甲斐金がOB会の総意ではなく、一部有志の出費によつてまかなわれたということ、現役で作成した名簿にOBとして名前が載っていないこと。つまり中途退会者でありながらOB会・会員として扱つかつたこと。もう一つはOB同志の連絡がとれず、消息不明のまま放置され、自殺という新聞記事によつてはじめてその消息がはつきりしたということ。これらの二点を考えると現在のOB会の存在とその活動を改めて考えなおさなくてはならないということが、昨年末よりOB有志が度々会合をもち話合つて

きまされたが、今年に入つてより一層の具体化を計るため在京OBに対してOB会再建の呼びかけを行い、それによつて参集したメンバーによつて規約作成委員会を開くことになりました。当初の希望として各卒業年度の代表による委員会としたかつかつたのが現時点で半数以上がそろつたので、良とせざるをえませんでした。すでに規約の検討に入つており、従来の問題点を改め、今後のOB会活動を有無実名ものにならないための具体案を検討中であり、例えは卒業したというOBと、OB会組織に加わっているOBとは区別されるべきか否か、同時にOB会会員とOBはどのようにならうのか、卒業して幾年月を経るほど、かつての青春の感は薄れゆくものであります。自分自身の若き姿を現役である学生諸君の中に見出し、胸をわくわくさせることがあつてもいいのではないでしようか。年代を越えてOBが一堂に会する機会があつてもいいのではないでしようか。これらの点を踏まえOB会活動をよみがえらせるべく皆様の積極的な御協力をあおぎたいと思ひます。

私個人の希望を述べさせていただきます。現役時代から「OB会」の存在することは知つていましたが、活動内容や方針がわからず、会費の徴収方法も定演に顔を出した時だけ取られ、顔を出さなければ催促も来ず、かといつて名簿から名前が抹消されることもない、というようなこと非常に曖昧な感じ、そのために自然と足が遠くなつたことがあります。これからは先ず、組織の存在することは勿論、活動方針や内容、又会員の資格や義務、又会費の額や徴収方法についてはつきりと規約化し、更にそれを会員全員に配布していただくと思ひます。もつとも規約も余り固苦しいものでなく、誰れでも気軽に入会できるようなものであつて欲しいのですが、更に通信連絡も余りなく、会報等も発行されなため情報が行きわたらず、地方のOBは勿論、余り顔を出さないOBも現役の行事予定位しかわからなかつたのではないかと思われます。OBの間の距離をもつと縮めるためにも、通信連絡の他に会報等の発行も何回か企画していただきたいと思ひます。そして各々の情報を交換し合ひ、仕事の上でも人生の上でも何らかのプラスとし、更に現役とも交流し、吹奏楽について共に話し、研究しあつていきたいものです。色々勝手なことを書き並べましたが、今後のOB会に期待し、私も協力をお願いしたいと思ひます。

有朋自遠方来不亦楽乎 最近「論語」を読み始めた。中国ブームに乗るためではない。都庁勤めも漸く十年になろうとして、自分をつめなめおすつもりで始めた。「子曰学而時習之不亦説乎。有朋自遠方来不亦楽乎。人不知而不愠不亦君子乎。」有名な学而篇冒頭の学の条理であり、また人生観でもある。先日ふとしたことで、それまで名前しか知らなかつた同僚に初めて面識に及んだ。その時の話。それから彼自身の存在そのもの、正に「有朋自遠方来不亦楽乎」であつた。古典は現代に生きていくのである。（未完）

何か書け 小野博美 学生時代に夢見ていた社会と現実との違いを痛感し、何とか自分の理想に近づけようと努力しながらもう七年がたつてしまつた。そんな中にも人並みに女房を貰ひ、その結果一人の子供もいる。親とは勝手なもので自分出来なかつた事や、やらずに後悔した事、又やつてよかつたことを子供に押しつけたがるものだと思ひはじめた。人生の一番よい時期に音楽に狂ひ、というよりも音楽狂の集まりが何かやらかすことに非常な興味を持ち、肝心の音楽を追求することを疎かにしてしまつた。これからの若者にとつて音楽は、我々が感じていた以上に密接なものとなるであろう。従つて伴が泣こうが、わめこうがある時期まで無理矢理にピアノを習わせようと思つて決してプロにするつもりはないし、又親を見れば無理だということも明らかである。ただ将来において何か楽器（そのままだピアノでもよい）でもいじりたいたくなつたとき、それが多少とも基礎になつていればよいのである。伴の意志で日大に入学するようになったら、クラスに入る事を勧めらるつらさだ。その時のクラスの姿が我々の時と余りに違つていたとしたら、それを時代の流れだからと言ふことで済ましてしまへるかどうかは疑問である。時代が変わる方が求めらるものはただ一つであり、それが伝統というものはないだろうか。私としては私達が過した時代を最良だと思つたそれはその時点までの伝統の積み重ねであり、それがそのまま続くことを望んでいる。「脱がし」とか、のどもとに蝶々を飛ばすとか、真夏の学ランを着ていきがるのか、雨にびしょ濡れになりながら野球の応援をする等々のパンカラで男つばい結構な伝統を絶やさないために、場所と接点を持ち、又同じ場所に青春を求めた仲間達と昔話しにひたるのも有意義なことだと思ふ。「袖すり合うも他生の縁」とか、この縁を大事にするにより、仕事

やその他もつと「ブラ」スになるものがある筈だ。皆さんもこの世の中でいかに「コネ」が巾をきかしているかという事を身をもつて感じていると思ふ。現状を見るに「後は野となれ山となれ」式ではあまりに情けないのではあないか。ここにOB会再建を強く望むものである。そして某、製薬会社のコーシヤルを地で打つけるような団体にして欲しいものである。

四〇年度OBの近況 佐藤式社 やつていますか。やつていますよ。四〇年度卒業生一同このな挨拶を交わしながら親睦を深め、楽しい会を年に二、三回開いている。昨年の十二月二十五日にはホテル・ニューオータニに於いてガーデンパーティーを催し、又七月には初めての企画で群馬県法師温泉、赤城山、榛名山に一泊のドライブ旅行を決定、参加台数五百二十台、スカイラインGT、トヨペット、プリンススカイラインの新車種をそろえ総勢十六名で楽しい夏の日を創りあげました。今年も静岡岡原を中心とした西の同期のメンバーを優遇するため、七月の上旬に伊豆地方への第二回目のドライブを企画中です。幹事は私と金沢の一名ですが、すでに参加希望者から連絡があり、ウエスタンの竹内、立花の両君の参加が決定しております。各年度のOB

OB会に望む 小林将夫 先日ある友人よりOB会再建の話聞きまして、今迄をかえりみて

OB会に望む 43年度卒 大沢和彦 44年度卒 長島光雄 45年度卒 東郷桂治郎 46年度卒 岩崎良吉 竹内幸雄

諸氏よりの差入れは幹事がお受け致します。よろしくおたの申しませす。以上近況まで。 考える習慣 竹島美弘 昔し、昔し、のお話して、ある偉い人が言つたのだ。「人間は考える葦である」と、物を考えるなかつた人間は牛や馬と同じであり、考えがとまると脳軟化症になつてしまふ。それが進むと白痴なのだ。 進歩的な考えの人と、そうでない人がいても物を考えるという事は同じだし、頭はそれなりに回転しているのだから変な病気になるないですむのである。てなことを私が少年の頃ある人から聞かれた。でも今の僕はどうでしょう。日大OB会OB会の会報の原稿を書けといわれても何を書いたらいいのかわからない。ひどいものである。今度こそ、もつとまじめにやろう。そして少しは物事に対して考える習慣をつけよう。 白痴になるのはいやだから。!!

会報発行...。よせばいいのに「健やるよ」。安請合をしるもの。手間のかかること...。でも原稿を気持よく書いて下さつた方にお礼申しあげます。今後ともよろしくお願ひいたします。